

自閉スペクトラム症児におけるアタッチメント行動の発達順序性

山口知慧¹・佐藤克敏²

(1: 京都府立八幡支援助学校・2: 京都教育大学)

A Study of Developmental Order of Attachment Behaviors in Children with Autism Spectrum Disorder

Tomoe YAMAGUCHI, Katsutoshi SATO

抄録: 自閉スペクトラム症児のアタッチメント行動の特異性について、定型発達児のアタッチメント行動の出現順序との比較から検討を行った。対象児は、定型発達児89名(平均月齢23.65か月(SD=8.27))、自閉スペクトラム症児129名(平均月齢61.71か月(SD=22.82))であった。各群についてOrdering Analysisにより項目ネットワークを構成した。結果、定型発達児群ではBowlby(1976)のアタッチメントの発達段階に沿う形で順序性が示されたが、自閉スペクトラム症児群ではその中でも特に「弁別した人物への接近の維持を図る段階」の行動が単独の時期として出現することがなく、「選択的アタッチメントの段階」や「アタッチメント対象からの自立に向かう段階」と並行して長期にわたって出現することが明らかとなった。このような段階の表れ方から、自閉スペクトラム症児のアタッチメント行動は定型発達児よりも出現が遅れるだけでなく、その発達順序および発達段階も定型発達児とは異なっていると考えられた。

キーワード: 自閉スペクトラム症, アタッチメント, 発達順序性

Key Words: autism spectrum disorder, attachment, Ordering Analysis

I. 問題と目的

自閉スペクトラム症は、発達初期からみられる社会的コミュニケーションおよび対人的相互反応における持続的な欠陥と行動・興味または活動の限定された反復様式を中核症状とする障害である。アタッチメントは特定の他者との相互作用の中で形成されるものであることから、自閉スペクトラム症児はアタッチメントの形成が遅れ、またアタッチメント行動も定型発達児のものとは異なるとされている。

別府(1994)は、アタッチメント対象の形成に加えて、言語及び非言語的コミュニケーション機能や象徴機能に弱さを持っていた1事例の発達経過を扱い、その対象児における発達を、特定の相手との関係の質と誰が特定の相手として形成されるのかを軸にその発達過程を「密接的接近対象の成立と他の拒否」が見られる第Ⅰ期、「密接的接近対象の拡大」が見られる第Ⅱ期、「不安・不快な場面で求める関係」が見られる第Ⅲ期、「不安な外界に立ち向かう安全基地」である4期に分けた。さらに、アタッチメント形成が自閉性障害児自身の象徴機能やコミュニケーション機能の発達と連関することが指摘されているという先行研究から、その段階区分と「喜び・不安・恐れ」の情動表出に見られる社会的行動、自我の発生として「要求行動」及び「呼名反応」、「常同行動・同一性保持」の4つの行動特徴との発達連関を示した。第Ⅰ期には、母子分離に伴う不快の情動表出が見られ、その他の情動表出や要求行動、呼名反応は見られないが、第Ⅱ期には、快の情動表出とそれに伴う要求行動が、第Ⅲ期には不快を特定の相手にある行動をしてもらうことで快に転換する行動、呼名反応の芽生えが見られ、第Ⅳ期には、相手と情動や意図のやりとりを伴う要求や呼名反応の確立が見られるとした。

さらに狗巻(2010)は、別府(1994)の研究に基づく形で対象児を1名設定し、そのアタッチメントの形成を別府(1994)による段階区分に準じる段階区分に次の段階に向かう移行期を加えた5つの段階に区分した。そして、別府(1994)の示した発達連関に加え、アタッチメント形成による段階区分と、共同注意行動および集団活動への参加形態の変化との発達の連関についての検討を行った。別府(1994)の第Ⅰ期と第Ⅱ期の間の移行期にあたるⅡ期

に具体物の獲得要求といった要求行動が見られるようになり、Ⅲ期には指さしやアイコンタクトを伴う要求行動、Ⅳ期には慰めなどの心理的要求、Ⅴ期には励ましや賞賛を求めるようになるなど、要求行動の変化が見られたとされる。しかし、別府(1994)や狗巻(2010)の研究はいずれも1事例を取り上げたものであり、その行動の出現や出現時期に個人差が含まれている可能性を排せない。

Ordering Analysisは、1-0型データから2項目間の順序性の有無を判定し、これに基づいて項目ネットワークを構成するものである(Airasian & Bart, 1973)。この分析を用いて伝達行動の発達順序性を示した小林・木原・佐竹・前川・進藤(1991)は、通過率の高低に関わらず、特異な順序性をもつ子どもも適合率という尺度を用いることにより発達順序性を判別することが可能であること、また、発達の遅い早いに関わらず順序性のみによって示されるこれらの結果は、個人差の大きいといわれることばの獲得期の鑑別手段として有効であることを示している。多次元の順序系列を求めるこの分析は、乳幼児のおもちゃに関連した遊びの発達順序性(今中・前川, 1996)、重度・重複障害児のコミュニケーションと発達連関(細渕・清水, 1989)、自閉症児における初期言語発達の順序性(李・小林, 1996)等においても、項目間の発達の連関をもった順序性を明らかにする方法として用いられてきた。

アタッチメント行動については、定型発達児においてもその行動の出現には4か月～12か月以後に至るまで、広範囲にわたる個人差が見られるとされている(Bowlby, 1976)。さらに、自閉スペクトラム症児を対象とした今回の調査では、認知発達や共同注意の発達にも個人差が見られ、それと関連してアタッチメント行動の発達順序に影響する可能性がある。そのため、発達の影響を考慮し、アタッチメント行動と発達の順序的な関連性についても検討することが求められる。

そこで本研究では、自閉スペクトラム症児及び定型発達乳幼児のアタッチメント行動の発達についてOrdering Analysisにより項目ネットワークを構成し、その構造について比較を行う。その際発達年齢を用いて比較することによって、知的な発達の遅れの影響を考慮した上で、自閉スペクトラム症の特徴による行動の差異について検討する。そのことによって、定型発達児とは異なるとされる自閉スペクトラム症児のアタッチメント形成のプロセスを明らかにすることを目的とする。

Ⅱ. 方 法

1. 調査対象

(1) 定型発達児

A地域の保育園4園に通う0・1・2歳児クラス在籍の乳幼児。

(2) 自閉スペクトラム症児（以下、ASD児とする）

自閉スペクトラム症の診断もしくはその疑いがありA地域の児童発達支援施設11園、放課後等デイサービス事業所2施設、知的障害特別支援学校小学部3校に通う幼児児童および、調査対象(1)のうち自閉スペクトラム症の診断のあった幼児。

2. 調査方法

(1) 調査用紙の構成

調査用紙はフェイスシート(対象児の性別、年齢、障害の有無や診断名等)および質問項目から構成した。質問項目は、『発達に関する項目』13項目、『アタッチメント行動に関する項目』26項目を含む計73項目であった。『発達に関する項目』は、遠城寺式・乳幼児分析的発達検査法(九大小児科改訂版)(遠城寺・合屋, 1977)を基に作成した。『アタッチメント行動に関する項目』は、別府(1994)、数井(2017)、立元・西山・田爪(2000)、上田(2002)を参考に構成した。なお、先行研究においてアタッチメント形成と関連して出現するとされた行動は含まなかった。

各項目について、対象児が現在しない(できない)が過去においてした(できた)ものは「以前そうだった」、現在する(できる)ものは「はい」、現在しない(できない)ものは「いいえ」、やったことがないのでわからないもの、どちらでもないものは「わからない」として各行動の出現の有無について回答を求めた。

(2) 手続き

対象児の所属する学校園・施設に調査紙を配布し、約1か月後に回収した。調査用紙への記入は、普段対象児とかかわりの多い保育者に依頼した。1人の保育者につき、対象児2名までの回答とし、回答者間において対象児が重ならないこととした。定型発達児については質問紙を134部配布し、104部(回収率77.6%)、ASD児は156部配布し、141部(回収率90.4%)の回答を得た。

3. 結果の処理

(1) 分析対象

定型発達児のうち、何らかの障害ありと回答のあったもの、および、対象児が所属する各月齢群において出現率が50%を超えた「発達に関する項目」に半数以上の出現なし項目があった対象児は、何らかの発達面の遅れがある可能性があるため分析から除外した。ASD児については、身体障害等の他障害の記述があったものについては分析から除外した。また、いずれの調査対象児においても、調査項目73項目のうちデータの欠損が4項目以上あるものは分析から除外した。分析対象児は、定型発達児89名(うち男児42名、女児46名、未記入1名)、平均月齢23.65か月(SD=8.27)、ASD児129名(うち男児97名、女児32名)、平均月齢61.71か月(SD=22.82)であった。

(2) 出現率及び出現月齢の算出

各項目について、その回答を「以前そうだった」「はい」を1(出現)、「いいえ」「わからない」を0(出現なし)と評価し、行動の「出現」の割合(出現率)を算出した。対象児を、定型発達児は月齢から、ASD児は『発達に関する項目』の出現項目による発達年齢から、月齢区分による分類と発達月齢区分による分類(以下、月齢/発達年齢区分)に分類した。月齢/発達年齢区分と各群に含まれる対象児数を表1に示す。

表1 調査対象者数

		人数内訳(名)			
月齢		男児	女児	未記入	計(名)
定型発達児	5か月～12か月	4	7	0	11
	13か月～18か月	7	11	0	18
	19か月～24か月	11	8	1	20
	25か月～30か月	9	8	0	17
	31か月～36か月	11	12	0	23
	計	42	46	1	89
生活年齢					
ASD児	26か月～36か月(2歳2か月～3歳0か月)	17	2	0	19
	37か月～48か月(3歳1か月～4歳0か月)	15	7	0	22
	49か月～60か月(4歳1か月～5歳0か月)	16	5	0	21
	61か月～72か月(5歳1か月～6歳0か月)	27	11	0	38
	73か月～84か月(6歳1か月～7歳0か月)	10	2	0	12
	85か月～140か月(7歳1か月～11歳8ヶ月)	12	5	0	17
計	97	32	0	129	

		発達年齢			
ASD児	～12か月	5	2	0	7
	13か月～18か月	25	4	0	29
	19か月～24か月	6	5	0	11
	25か月～30か月	14	1	0	15
	31か月～36か月	20	6	0	26
	37か月～	27	14	0	41
	計	97	32	0	129

アタッチメント行動に関する項目について、月齢／発達年齢区分ごとに項目の出現率を算出した。また、各項目の出現率が初めて50%を超えた月齢区分を出現月齢区分とした（以下、出現月齢とする）。ただし、一度出現率が50%を超えるものの、その後のすべての月齢／発達年齢区分において出現率が50%を超えなくなったものは、発達の一時期のみに出現する項目として扱った。また、一時期のみ出現する項目を除き、出現率が50%を超えた次の月齢区分において出現率50%に達しなかった項目については、その2区分の出現率の平均を求め、50%に満たなかった場合は次に出現率が50%を超えた月齢区分を出現月齢とした。なお、いずれの月齢／発達年齢区分においても出現率が50%を超えなかったものは、出現無しとして扱った。

(3) 項目ネットワークの構成

いずれかの月齢区分において出現率が50%を超えたアタッチメント行動に関する項目を分析対象として、Ordering Analysis（三宅・清水・及川, 1984a;1984b）による分析を行った。順序性の判定は（三宅・清水・及川, 1986）によって再現性が高いとされた判定基準を用いた。Ordering Analysisの判定基準を図1に示す。順序性の判定基準の下限値は、0.7及び0.8を用いた。この基準を満たすとき、項目*i*→項目*j*の順序性が成立するとされる。

		項目j		計
		0	1	
項目i	0	a	b	a+b
	1	c	d	c+d
計		a+c	b+d	N

$$\text{判定基準} : L_{ij} = \frac{2N(2a+b)-(2a+b+c)^2}{(2a+b+c)(b+c+2d)} \geq \phi \quad (\text{下限値} : 0.7 \leq \phi \leq 0.8)$$

図1 2×2クロス集計表及び判定基準

また、A→B, B→C, A→C, D→Cの順序性が得られた場合には、A→Cの関係はA→B→Cの順序系列に含まれるため、A→Cの矢印は省略し、A→B→Cと簡略した（図2）。A→BとB→Aの両方に順序性ありの判定が得られたときはAとBは等価であると判断しA=Bと示した。等価の判定については $\phi \geq 0.8$ を採用した。

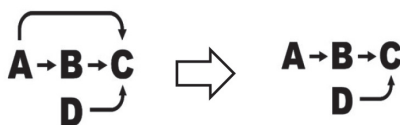


図2 項目ネットワークの例(簡略前と簡略後)

いずれかの項目の出現または出現無しの度数が、いずれかの項目のみ出現しもう一方は出現なしである度数に比べて相対的に大きい場合や一時期のみ出現する項目の場合には、全体の流れに逆行する矢印が出現するなど判

定値が不安定になることがあった。そのため、出現率がいずれの発達年齢区分においても80%を超えるものは順序性の判定からは一度除外し、発達初期に獲得されるものとして項目ネットワークの初めに組んだ。また、一時期のみ出現する項目については一度分析から除外し、全体の順序性を判定した後で獲得期までの月齢において順序性を判定し、全体のネットワーク図に組み入れた。

(4) 出現月齢による構造の検討

出現月齢の後の区分において、2月齢区分以内出現率が75%を超え、その後も出現率が75%以上となる項目(出現月齢30か月以降の項目については、その後出現率50%を維持する項目を含む)を分析対象とし、それらの項目の出現月齢を項目ネットワーク上に反映し、その構造を検討した。ASD児については定型発達児の結果も併せて検討を行った。

4. 倫理的配慮, 説明と同意

本研究は京都教育大学の研究倫理委員会の承認を得て実施した(受付番号1701)。対象児の所属学校園長に対して口頭および文書を用いて目的と内容を説明し、管理者として許可を得た。対象児保護者に対しては管理者を通じて書面で研究協力を依頼した。そのため、調査紙の提出をもって保護者からの同意が得られたと判断した。調査紙は無記名とし、調査紙の提出をもって同意を得るものとした。

III. 結果

1. 定型発達児

アタッチメント行動に関する項目のうち「見知らぬ人に、かわいがられ喜ぶ」「あなたの居場所を常に注意する」「あなたに対してわがまま」を含む7項目についてはいずれの月齢区分においても出現率が50%を超えなかった

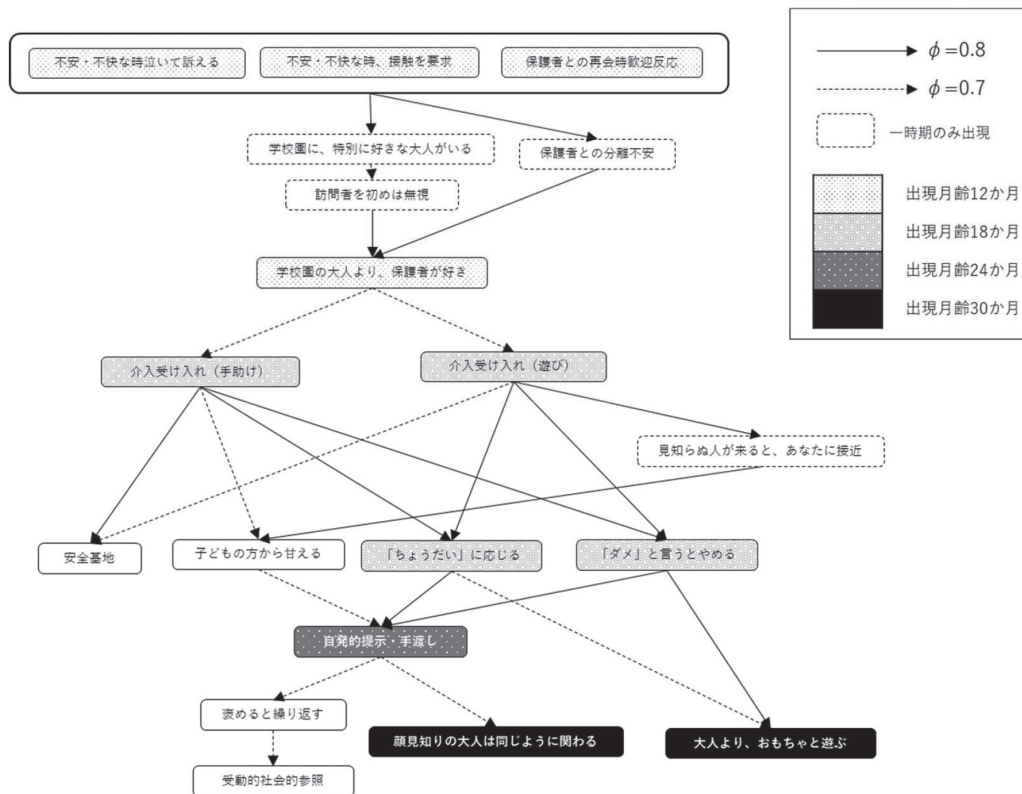


図3 アタッチメント行動の項目ネットワーク (定型発達児)

ため、項目ネットワーク上に反映された項目は19項目であった。そのうちの「学校園に、特別に好きな大人がいる」「保護者との分離不安」「訪問者を初めは無視」「見知らぬ人が来ると、あなたに接近」の4項目は、24か月齢までの一時期のみ出現した。「安全基地」「子どもの方から甘える」「褒めると繰り返す」については、出現月齢後の月齢区分において一度出現率75%を超えたもののその後の月齢区分では出現率が50～75%水準に下がった。また、「受動的社会的参照」は出現月齢後の3区分全てで出現率が75%を超えなかった。このため、これら4項目は出現月齢による構造の検討からは除外した。なお、今回の項目ネットワークでは、等価と判定された項目はなかった。

Ordering Analysisにより定型発達児のアタッチメント行動に関する項目ネットワークを作成し、出現月齢による区分を反映したものを図3に示す。いずれの月齢区分においても出現率が80%を超えていたものは、項目ネットワークの一番初めに、四角く囲って示し、一時期のみ出現する項目については点線で囲って示した。また、出現月齢による構造の検討の対象とならなかった項目については白抜きとした。

項目ネットワークは、出現月齢によって順に4つに区分された。出現月齢12か月のもの構成された1区分目には、「保護者との再会時歓迎反応」「保護者との分離不安」「学校園の大人より、保護者が好き」といった、保護者を対象としたアタッチメント行動が全て、順を追って出現した。保育者との関係の中では、不安・不快な時の泣いて訴える行動と接触を求める行動が同時期に出現した。その後出現月齢18か月のもの構成される2区分目には、「介入受け入れ」が遊びに関しても手助けに関しても出現し、「ちょうどいいに感じる」ことや「ダメ」と言うをやめると言った行動もみられた。また、この時期には、「子どもの方から甘える」行動や「見知らぬ人が来ると、あなたに接近」「安全基地」が出現した。その後、「自発的提示・手渡し」が出現した後「顔見知りの大人は同じように関わる」行動の出現とともに「大人より、おもちゃと遊ぶ」「受動的社会的参照」が出現した。

2. ASD児

ASD児のみに出現したアタッチメント行動に関する項目はなかったが、定型発達児では出現していた「学校園に、特別に好きな大人がいる」「訪問者を初めは無視」「見知らぬ人が来ると、あなたに接近」「顔見知りの大人

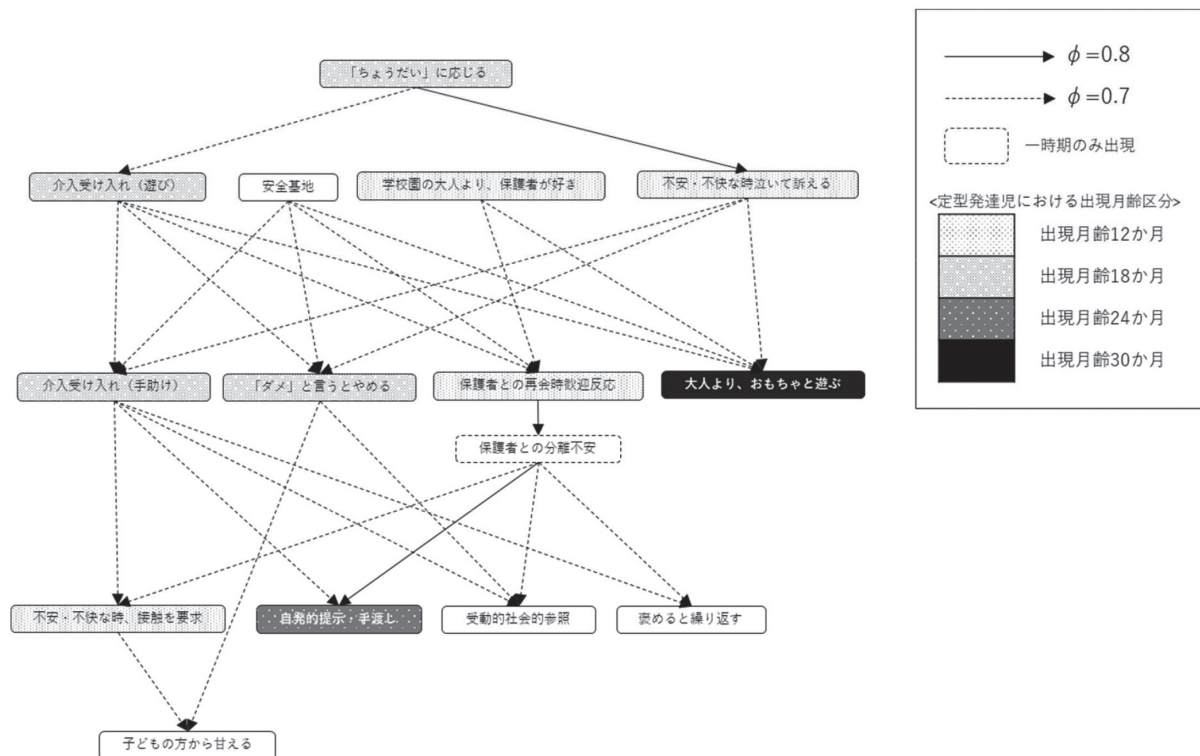


図4 アタッチメント行動の項目ネットワーク (ASD児)

は同じように関わる」についてはASD児では出現しなかった。このため、項目ネットワーク上に反映された項目は15項目であった。このうち、「保護者との分離不安」が発達年齢区分13～18か月、生活年齢36か月齢以下で一時期のみに出現した。

Ordering AnalysisによりASD児のアタッチメント行動に関する項目ネットワークを作成した。ASD児の項目ネットワークは、定型発達児とは違い、ASD児の発達月齢区分による出現月齢では明確に区分できなかった。定型発達児とASD児の項目ネットワークと項目の出現時期を比較検討するため、ASD児の項目ネットワークに定型発達児群の発達月齢の区分を加え、図4に示した。定型発達児の分析と同様に、一時期のみに出現した行動については、図中白抜きに点線で囲って表示した。

ASD児の項目ネットワークは、定型発達児のものとは比べ、一つの項目が多数の項目に連なる複雑な図となった。また、定型発達児ではごく初期に出現している項目であっても、「不安・不快な時泣いて訴える」のように定型発達児と同様に初期に出現するものから「不安・不快な時、接触を要求」のように項目ネットワークの後半にさしかかってから出現した項目があった。

定型発達児では項目ネットワークは出現月齢によって区分されていたが、ASD児では同時期に複数の出現月齢の項目が出現した。項目ネットワーク全体で見ると、定型発達児において出現率が不安定であった項目を除くと、項目ネットワーク上部に出現月齢18か月の項目、下部に出現月齢24か月以降の項目が出現し、全体にわたって出現月齢12か月の項目が出現した。

定型発達児では、「介入受け入れ(手助け)」及び「介入受け入れ(遊び)」は、それぞれほぼ同時期に出現しており、それらの行動の出現を経て次のアタッチメント行動に順序性が示されていたが、ASD児においては「介入の受け入れ(遊び)」の後に「介入の受け入れ(手助け)」が出現し、その行動の出現に順序が示され、それらの行動以外のアタッチメント行動から次のアタッチメント行動へつながる順序も示された。

IV. 考察

1. 定型発達児におけるアタッチメント

生後12か月までの項目の順序系列を見ると、ごく初期に不安・不快な時に泣いて訴えたり、接触を求めたりする行動が見られ、その後特別に好きな大人が出現するなど、周囲にいる多くの大人の中から特定の大人をアタッチメント対象として意識する行動がみられた。ただし、まだこの時期には見知らぬ大人という不安を引き起こすものが現れてもそれを無視するにとどまり、自らアタッチメント対象に接触を求める行動にまでは至らなかった。

生後18か月になると、大人からの介入を受け入れたり簡単な指示に従うなど、相手の意図を理解したりそれに応じる行動が見られるようになった。この時期には、見知らぬ大人がいるような危機や不安を感じる状況になると自分からアタッチメント対象に接近するなど、不安や不快な状況でアタッチメント対象に接触する、アタッチメント対象者を安全基地として利用する行動が出現した。

その後30か月までに、アタッチメント対象から自立し、大人と一緒になくてもおもちゃと遊び込めるようになり、知っている大人に対しては誰にでも同じように関わる行動が出現した。この時期には、はじめ不安を感じたものに対してアタッチメント対象への接近や接触を伴わなくても、保育者が「大丈夫よ」などと言って安心させると、はじめは用心したり怖がっていた物に近づいたり遊ぶことができるようになった。

中盤に出現した介入の受け入れに関しては、活動をより楽しいもの発展させる遊びに関する介入の受け入れも、鼻かみのような活動を一時中断させられるような手助けに関する介入の受け入れも同時期に近い形で出現した。大人からの介入や関わりを受け入れるこの時期を経たのち、自分から甘えたり、おもちゃを見せに来たりと、自らアタッチメント対象に働きかける行動が出現した。

このような結果から今回項目ネットワークおよび出現月齢によって示された発達順序性および区分は、その出現順序から、Bowlby (1976)によるアタッチメントの発達段階における、ひとり(または数人)の弁別された人物に対する定位と発信を行う選択的アタッチメントの段階である第2段階、弁別した人物への接近の維持を図る第

3段階、アタッチメント対象を表象として自分の中に留める目標修正的協調性を形成する第4段階にあたると思われる。

ただし、Bowlby (1976)は生後6か月ごろまでを選択的アタッチメントの段階、2歳までを弁別した人物への接近を図る段階としていたが、今回の結果からは、それぞれ12か月齢まで、18か月齢までとなり、また、18か月齢から36か月齢までに目標修正的協調性形成の段階に入り始めるなど、その段階の出現月齢に関しては異なっていた。しかしながら、本研究においても主たる養育者である保護者との分離不安を尋ねた項目は13～24か月齢までで出現し、Bowlby (1976)の分離不安段階の出現時期に一致していたことから、第1アタッチメント対象者である母親とのアタッチメント行動について示したBowlby (1976)の出現時期と、第1アタッチメント対象者の存在を前提とした保育者とのアタッチメント行動を中心に調査した本研究とは調査対象が異なっていたことが影響を与えたと考えられる。また、Bowlby(1976)が示したように、アタッチメント行動の出現については、個人差が影響を与えている可能性がある。

2. ASD児におけるアタッチメントおよび定型発達児との違い

ASD児においても、多数のアタッチメント行動が出現していることから、一定のアタッチメントを形成していると言える。しかし、その項目ネットワークの複雑さや発達月齢区分では明確な区分ができなかったことから、アタッチメント行動の出現には認知発達だけでなく様々な要因が影響を与えている可能性が示された。

定型発達児ではBowlby (1976)のアタッチメントの発達段階に沿う形で順序性が示されたが、ASD児では定型発達児と同様に項目ネットワーク前半に「選択的アタッチメントの段階」、後半に「目的修正的協調性形成の段階」の行動が見られるものの、「弁別した人物への接近の維持を図る段階」の行動が長期にわたって平行して出現することが明らかとなった。定型発達児においては最も早期に出現していた不安・不快な時に泣いて訴えたり、接触を要求する行動では、ASD児は泣いて訴える行動の出現から接触を要求する行動の出現までに複数の他のアタッチメント行動の出現を経ていた。このように、定型発達児ではごく初期に出現する行動であってもASD児ではかなり遅れて出現するものがあり、アタッチメント行動の出現に共同注意の発達や大人との関係性の成立など様々な条件が影響を与えている可能性がある。

定型発達児では大人からの介入を受け入れる時期を経た後、「ちょうだい」や「ダメ」といった大人の意図を理解し応答する行動が見られるようになり、その後自らアタッチメント対象に働きかける行動が出現した。一方ASD児では、「ちょうだい」のような言葉で伝えられた他者の意図に応じる行動がまず出現し、その後介入を受け入れる行動が遊びに関するもの、手助けに関するものの順に出現した。ASD児では遊びに関する介入を受け入れた結果自身の活動がより楽しいものに発展した経験が、鼻かみのように活動を一時中断させられるような手助けに関する介入を受け入れることに繋がった。このように、ASD児においては他者からの介入が自身に快をもたらすという経験の広がりによって、保育者に対するアタッチメント行動が順を追って出現すると考えられる。

このことから、ASD児のアタッチメント行動は定型発達児よりも出現が遅れるだけでなく、その発達順序および発達段階も定型発達児とは異なっていると考えられる。しかし、この発達順序は先行研究で示されていた発達段階とは異なるものであった。保育者との関係性からそのアタッチメントの形成過程を示した別府(1994)や、その研究に基づいて行われた狗巻(2010)の研究においても、母親との密着的接近および分離不安の出現後、特定の保育者への密着的接近の時期を経て、不特定多数の保育者との関係性を築いていくという経過が重視され、それに基づいた区分が行われていた。しかし、今回の調査では、「学校園に、特別に好きな大人がいる」「顔見知りの大人は同じように関わる」はいずれも出現率50%を超えなかったが、この行動の出現の有無にかかわらず、不安・不快な時に他者を求めたり子どもの方から甘えるなど、多様なアタッチメント行動が出現していた。

ASD児では、自らの遊びに対する介入の受け入れが、手助けに関する介入の受け入れに先行して出現するように、他者の関わりが自身に快をもたらすという経験や、不安や不快な時に泣いて訴えたことに対して応じてもらった経験が同様の場面で接触を要求する行動や自ら大人に甘える行動につながるなど、特定の大人との関係の成立、とりわけ、その大人が自分の行動に応答的に反応してくれるという関係の成立がアタッチメント行動の発達に影

響を与えていると考えられた。このことは、ASD児において、相互作用の持続(伊藤・西村, 1999), 共同注意の発達(狗巻, 2013), アタッチメントの形成(神園, 2000)に大人の応答的関わりが必要とされるという先行研究からも指摘されている。本研究の結果もそれを支持するものであり、ASD児の発達支援にもその重要性について示唆を与えるものであると考える。

定型発達児では危機を感じるような「見知らぬ人が来る」という状況でも、ASD児ではアタッチメント対象に接近を図る行動は出現しなかった。一方で、ASD児は小さな変化に対して極度の苦痛を感じたり、感覚刺激に対する過敏さを有するなど、その障害特徴に起因する特有の不安や不快があるだろう。そういったASD児の不安や不快に対して大人が敏感に反応してくれた、大人との関わりの中で不安や不快が軽減されたという経験を重ねることが、不安・不快な時に泣くだけでなく接触を求めるようなアタッチメント行動の変化をもたらすかもしれない。本研究は別府(1994)や狗巻(2010)の示した発達段階とは異なっていたが、それらの研究はいずれも単一の事例研究であり、変化への不安や固執といったASDの特徴が強く、言語・非言語コミュニケーションに重篤な障害があるという同一の基準により選定されていた児を対象としていたため、対象児の個人の特徴が結果に示された可能性が考えられる。

これらのことから、本研究で明らかとなったASD児の特異なアタッチメント行動の発達順序性は、認知発達だけでなく、自閉スペクトラム症の中核障害である共同注意の発達、自閉スペクトラム症の特徴の強さなどと関連している可能性が示唆される。本研究では各対象児について、自閉スペクトラム症の特徴の強さや周囲の関わり方などについては調査できておらず、今後はこのような特徴によってアタッチメント行動の出現、発達順序が異なるのかについて検討が必要である。

参考・引用文献

- Airasian, P. W., & Bart, W. M. (1973) Ordering theory: A new and useful measurement model. *Educational Technology*, 5, 56–60.
- 別府哲 (1994) 話し言葉をもたない自閉性障害幼児における特定の相手の形成の発達. *教育心理学研究*, 42(2), 156–166.
- Bowlby, J. (1976) *Attachment and Loss: Vol.1; Attachment*. Basic Book. 黒田実郎・大羽葵・岡田洋子・黒田聖一(訳) (1991) *母子関係の理論 I 愛着行動* (新版). 岩崎学術出版社.
- 遠城寺宗徳・合屋長英 (1977) 遠城寺式・乳幼児分析的発達検査法(九大小児科改訂版). 慶応義塾大学出版会.
- 細潤富夫・清水貞夫(1989) 重度・重複障害児のコミュニケーション活動の指導内容・方法と発達関連. *長野大学紀要*, 10(3), 15-24.
- 今中博章・前川久男 (1996) おもちゃに関連した遊びの発達順序性—選択支援と発達評価の視点からの検討—. *心身障害学研究*, 20, 117–126.
- 狗巻修司 (2010) 自閉症幼児の保育者への愛着の形成過程・障害特性と集団活動への参加形態の発達の变化に着目して—. *障害者問題研究*, 38(1), 68–77.
- 狗巻修司 (2013) 保育者のはたらきかけと自閉症幼児の反応の縦断的検討: 共同注意の発達との関連から. *発達心理学研究*, 24(3), 295–307.
- 伊藤恵子・西村章次 (1999) 自閉症障害を伴う子どもの相互作用成立要因に関する分析的研究. *発達障害研究*, 20(4), 49–63.
- 神園幸郎 (2000) 自閉症児における愛着の形成過程・母親以外の特定の他者との関係において—. *琉球大学教育学部障害児教育実践センター紀要*, 2, 1–16.
- 数井みゆき (2017) II. アタッチメントのアセスメント 第4章 観察法 Part2 アタッチメントQソート法. 北川恵・工藤晋平(編著), *アタッチメントに基づく評価と支援*. 誠信書房, pp. 87–101.
- 小林重雄・木原利憲・佐竹真次・前川久男・進藤桂子 (1991) 言語発達遅滞児の発達順序性からみた伝達行動の変化. 平成2年度厚生省心身障害研究「障害幼児を中心とした治療教育法の開発と統合化に関する研究」報告書.

- 李玄玉・小林重雄（1996）自閉症児における初期言語発達の順序性に関する研究：韓国版「ことばのようす」による検討. 特殊教育学研究, 34(3), 33-44.
- 三宅信一・清水貞夫・及川克紀（1984a）Ordering theory の諸手法の比較-データにおける順序性判定基準の検討-. 電子通信学会教育技術研究報告, ET 83(10), 45-48.
- 三宅信一・清水貞夫・及川克紀（1984b）Ordering theory の諸手法の比較(2)-仮想データによる検証-. 電子通信学会教育技術研究報告, ET84(4), 25-29.
- 三宅信一・清水貞夫・及川克紀（1986）Ordering theory の諸手法の比較(3) -仮想データによる検討-. いわき短期大学紀要, 11, 180-190.
- 立元真・西山修・田爪宏二（2000）保育者-子ども間の愛着測定を試み(2)～幼稚園・保育所における測定の試み～. 日本保育学会大会研究論文集, 53, 736-737.
- 上田七生（2002）乳児と保育者との愛着関係の発達および変容の過程-第一愛着対象者との愛着関係が不安定な乳児を対象に-. 広島大学大学院教育学研究科紀要, 3(51), 359-363.